

佛蘭西書巡覧 34

平山弓月

わたしたちは、ある国に住むのではない。ある母語に住むのである。
祖国とは母語である。

エミール・ミッシェル・シオラン

わたしたちは日々「ことば」の習得に動んでいます。しかし、「ことば」の運用能力の向上に忙しく、「ことば」の社会的役割に、想いを馳せることはあまりないのではないのでしょうか。

そこで、今回は「ことば」の中でも特に「母語」をテーマにすえた、アルフォンス・ドーデ *Alphonse Daudet(1840-1897)* の、『月曜物語』 *Contes Du Lundi(1873)* に収められている「最後の授業」 *La Dernière Classe* を取り上げましょう。この小品はわが国でも教科書に収録されたこともあり、多くの皆さんにもよく知られているのではないのでしょうか。

ドーデは南フランスのニームで生を受けましたが、実家の破産で苦勞をかさね、パリに出て文学修業に励みました。生まれ故郷の南フランスを舞台とした短編集『風車小屋便り』 *Lettres de mon moulin(1866)* で地位を確立しました。この短編集の中の一編「アルルの女」 *Arlésienne* は、その後舞台化されたり、ビゼの手によりオペラ化されたりして、わが国でも夙に有名になりました。

本題に戻りましょう。1870年にナポレオン三世治下のフランス帝国は、隣国のプロシアと戦いました。世にいう普仏戦争です。結果は、十分に準備を整えていたプロシアの勝利に終わり、フランスの一部アルザス・ロレーヌはプロシア領になりました。『月曜物語』は、この戦いに自ら従軍した時期を背景とした、アルザスの物語で、敗戦後の1871年から73年まで、毎週月曜日に新聞に連載されたのです。短編集の冒頭を飾る「最後の授業」はフランス敗北直後の、「ことば」つまりフランス語の運命をめぐるお話なのです。

« Mes enfants, c'est la dernière fois que je vous fais la classe. L'ordre est venu de Berlin de ne plus enseigner que l'allemand dans les écoles de l'Alsace et de la Lorraine..... »

「みなさん、私がこの授業をするのはこれが最後です。ベルリンから命令がきました。アルザスとロレーヌの学校では、もうドイツ語しか教えられません……」

授業に遅刻し、いつもならアメル先生に叱られるのを覚悟していたフランス少年は、いつもと違う教室の雰囲気戸惑いながら、席につき先生の言葉を聞いたのです。

フランス語の習得に熱心でなかったフランス少



年に向ってアメル先生は、ドイツ人たちが言うであろう言葉を口にします。

« Comment ! Vous prétendiez être Français, et vous ne savez ni lire ni écrire votre langue ! »

「なんだって、君たちはフランス人だと言い張ってきていたのに、君たちのことばを読むことも書くこともできないじゃないか。」

さらにドーデはアメル先生の口を借りて「母語」の重要性を語ります。

«quand un peuple tombe esclave, tant qu'il tient bien sa langue, c'est comme s'il tenait la clef de sa prison..... »

「ある国民が奴隷状態に落ちても、自分たちのことばをしっかりと持ち続けている限り、牢獄の鍵を手にしているということなのだ……」

「フランス語は世界で一番美しく、一番明快で、一番信頼に足ることばである」とのアメル先生の考えは、フランス人であるドーデの、いな、フランス人全体の思いであると言えましょう。まさに「祖国とは母語である」と書いたシオランの断言を、ドーデは早くも文学に昇華させていたのです。

ところで、言語学者田中克彦は「ことばと国家」で、これに異議を唱えました。アルザスは歴史的に見れば、元来ゲルマン系の人々の地であり、17世紀の三〇年戦争の結果フランスの支配下にはいり、フランス語教育が行われたのであるとしています。アルザスの本来のことばは、ドイツ語の一方言であるアルザス・ドジン語であり、アルザス人の「母語」はフランス語ではないと書いています。「背景をよく考えてみると、「最後の授業」は、言語的支配の独善をさらけだした文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一篇でしかない」と断罪しました。

フランス語フランス文化の学徒である筆者には悩ましいことです。皆さんには、この掌編を手に取り、ご自身で判断していただきたいと思います。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)